

短大における教育実践

四大編入との関わりで



蔵原 三雪

武蔵丘短期大学

はじめに

今年二〇〇〇年は短期大学が発足してちょうど五十周年に当たる。発足当初、急増期、そして十八歳人口の急減期と五十年間にめまぐるしく変化してきた環境の中で短期大学は高等教育の様々な改革の中で今後自らのアイデンティティをどこに求めるのか、その役割を明確に打ち出す必要に迫られているところである。

短大はその発足経緯からどちらかと言えば実学的な教育を行うことを目指してきた。その大半が女子向けの短期大

学であり、かつては卒業後就職せずに「家事手伝い」をして結婚する人達も多かったが、現在の短期大学では様々な職業資格や教養的な内容の資格取得を教育目的に掲げる学校が多い。つまり短大卒業生の進路は就職者が大半を占め、ほかに四年制大学(以下四大とする)や専門学校等への編入学が約一割である。一九九一年の大学設置基準の改正以降、短大から四大への編入の条件が広がった。それまで編入学生を受け入れていなかった四年制大学も受け入れるようになり、短大生にとって編入学が進路選択の一つとして考えられるようになってきた。

短大をめぐる位置づけの問題との関連で短大に入学してきた学生がどのような動機から四年制大学へ編入したいと考えるのだろうか、そこに至るまでの短大での学習はどのような意味があるのだろうか、さらには四大編入希望者の増加は短大にとってどのような意味を持っているのだろうかなどについて明らかにする事が必要であると思われる。その課題にむけて一つの素材として武蔵丘短期大学の事例（健康体育専攻の場合に限る）を紹介しながら考えたい。

最近の短大生の進路状況と四大編入希望者の傾向

二〇〇〇年度現在、短期大学の数は五百七十四（国立二からはら・みゆき・一九四七年、北海道生まれ・主な著書に「継続教育を見通した短大教職課程の教育」（加納弘一と共著、武蔵丘短期大学紀要第六号、一九九八年）、「武蔵丘短大卒業生の本学入学目的と学生生活の満足度―卒業生のアンケート調査の中間報告―」（太田あや子と共著、武蔵丘短期大学紀要第七巻、一九九九年）、「短期大学における教員養成―五十年をふりかえって―」（日本教師教育学会年報「近刊」）、「W. E. Gibbsの理化学教養の形成―ラトガース大学科学教育の展開を通して―」（「科学史研究」二〇〇〇年秋近刊）、「W・E・グリフィスの明新館における教育活動」（共著、「幕末維新期における学校の組織化」多賀出版、一九九六年）●なお、現在日本私立学校振興、共済事業団の補助金によって、「特色ある教育研究」を平成十年度から共同で行っている。その一部として四大編入者も含めて、卒業生に対するインタビュー調査も行った。今後は、四大との共同研究もすすめたいと考えている。

十、公立五十七、私立四百九十七）校である。一九五〇年、短大は百四十九校から出発し、一九九六年度の五百九十八校をピークにその後減少傾向を示している。学生数で見ると一九九九年度三十六万八千二百三十七男三万六千七百六十、女三十三万四千四百七十七）人で男子学生がほぼ一割を占めている。

短大生の進路は就職が約六割で「大学等への入学者」が八・八％である。「大学等への入学者」は大学、短期大学の本科、別科、専攻科へ入学した者が含まれるが、このうち大学へは八四・一％である。この割合は一九五五年度の統計と共通している。すなわち当時短大生は二万八千四百七人で現在の八％にも満たない学生数であったが、このときの「大学等への入学者」は九・四％であった。これより以後一九八五年まで「大学等への入学者」は減少し続け、一九九〇年から増加傾向を示すようになった。

四大でも在学中から専門学校とのダブルスクールや卒業後別の専攻・専門分野の大学や専門学校に編入する人が増加している。短大から「大学等への入学」希望者もこうした流れの一端とも言えるだろう。このような傾向は高校時代に自己の進路を決めかねて、短大二年間あるいは大学四年間の生活のなかで漸く進路を見つける学生が増加して

いることを示している。

短大入学の動機と四大への編入

さて武蔵丘短期大学は健康生活科一学科で、その中に健康栄養と健康体育の二専攻をおいた、今年で十周年の若い男女共学の短期大学である。健康栄養は主に栄養士養成コース、健康体育は保健体育中学二種の教員免許の他に健康運動実践指導者、A.D.I.(エアロビックスエクササイズインストラクター)等の資格をとることができるようになりキュラムを組んでいる。

健康体育専攻から「大学等への入学者」はほぼ全国平均にちかい。その中でも中学校教員免許取得者から編入希望者が多い傾向にある。

最近の短大生の入学動機は様々である。タイプ分けをしてみると次のようなグループに分けられる。

(Ⅰ)のタイプ 中学校・高校と部活に熱中し、練習・試合のために大学進学への準備をする時間を特別にとることが出来ないの、「推薦入学が出来る大学を選択した」「僕は工業高校だったので推薦される学校は短大か専門学校だったの、短大にした」などの理由で最初から短大を選択してきた学生。

(Ⅱ)のタイプ 「四年制大学の試験に失敗してとりあえず、短大に入っておこうと思った」「体育系の予備校に相談したら、四大はダメでも短大に入って勉強すれば四大へ編入が出来る」と教わって、入ってきた」「最初から四大をねらうのは自分の力では無理だから出来れば四大に入学したいが、とりあえずのステップとして短大に入る」など第一志望は四大であるが、次善の選択として短大に入学してくる学生。

(Ⅲ)のタイプ 「高校まで進路についてはあまり真剣に考えないできた。でも友達が行くし、親も短大くらいは出しておけというから来た」と言う学生。

このように様々な動機で入学してくる学生達から構成されるので、四月のガイダンスから実に各人各様の構えで学校が始まる。(Ⅰ)(Ⅲ)のタイプははじめの動機が短大第一志望であるからすぐ短大の生活になじんで、高校までに出て来なかったアルバイトとおしゃれをして、友達を作り楽しく過ごしたいと考えたり、高校までの部活を継続し技術の向上を目指したり、新たな種目に挑戦したりと好きなスポーツをする事と学校生活を楽しむことの両面を積極的に展開するのが見られる。これに対して(Ⅱ)のタイプはにぎやかなグループからは一歩引いて自分のやりたいことにま

っしぐらになる学生やなかには「第一志望ではなかったのだから、この短大では友達は何らなくてもいい」と考える学生もいる。このような学生は入学早々から「どうやったら四大へ編入出来ますか」「編入のためには一年生から何をやったらよいですか」と質問をしてくる。編入の事だけを追求してはせっかくなかった短大生活も貧弱なものになってしまおうので、そのような学生にはまず何に一番力を入れたいのかを考え、短大での目標をはっきりさせることを勧めている。

高校までの受験のイメージを持った学生の中には「こっそり一人で勉強して受かりたい」と考えがちである。授業はもちろん部活や友人関係、学生のイベントなどさまざまな体験を広げることが結果的には学生達の学問のイメージを豊かにすることになる。

資格取得を目指す短大での学習

どんな動機で入学した学生も「一つでも多く取れる資格は取りたい」「せっかくなかったのだから短大で学んだ印としても資格を取りたい」と資格取得に対する関心が総じて高い。ちなみに第一期から六期までの卒業生(健康体育専攻)が取得した資格を上位三番目までで見ると一位健康運

動実践指導者、二位キャンプ指導者、三位中学校教員免許である。その中でも「中学校や高校でお世話になった部活の顧問や体育の先生のように自分も体育を教えてみたい」「運動する楽しさを伝えたい」と教員免許は短大では高いハードルではあるが、学生達にとって魅力ある資格の一つである。

例えば教員免許を取るには二年間という短い期間の在学期間で二種免許とは言え、四大と同じような資格を取得するために教職科目(卒業単位にならない)を十五単位履修するのは楽なことではない。短大で体育や健康に関する専門科目(運動処方論、運動生理学、スポーツ医学など)を学んだり、実技の向上を考えつつ練習に励んだ上で、学生達は教育実習で実際に中学生を教える経験をする。実習ではじめて自分が学んできた専門的な知識や技術を実際に使うのである。

「教育実習に行くまでは教職をとっていない人と授業時数が違ったり、テストが難しかったりして大変だけど、教育実習に行った後に得る達成感、満足度は教育実習に行く前の大変なこととは比べようもないほどいいものです」(二〇〇〇年度履修者)とその大変さを越えた「達成感」が強調される。また悩みを持った生徒達との交流から「教員の

仕事の大切さと楽しさを知った」、「私にとって教育実習というものは教師になりたいという気持ちを高める再確認の場であったと思います。生徒と共に過ごす毎日というのは一日一日成長などが見られて新鮮な日々を送ることが出来たと思います。そして何よりも自分は子どもが好きだと言ったことがわかり、本当に教師として、生徒に関わって行きたいと思いました。教師は、生涯やっていく仕事として最高のものだと思います」(二〇〇〇年度履修者)などの感想を述べるようになる。

実習をしながら自分は自己の記録の向上に一番の関心があるのか、それとも教えた相手(子どもや大人)が成長することを仕事の喜びと感ずることが出来るのかなど自己の性格・仕事への適性を考え、悩む。こうしてはじめて「自分が一生の仕事にするのは何か」、「スポーツが好きでここまでできたけど、いざ職業を考えると好きなことを職業にしようまくいくのだろうか」といった課題と向き合うのである。そのような中から「是非もつと力を付けて教員になりたい。一種免許を取るために四大に編入して勉強しよう」と考える学生が出てくる。

このように見ると学生達がこだわる「資格取得」は短大での学習の中で、それは単なる資格の学習ではなくもつと

広い意味を持つていることに気づく。つまりどんな小さな資格にせよそれ取得するために自ら積極的にその資格を取ろうと考えて授業にも出席し、教職科目だけでなく教科の専門科目も幅広く履修しなければならない。その中で知らず知らず「勉強・学問」のおもしろさに近づくことになる。

資格取得のためには運動処方論実習、教育実習、野外活動などいずれも実体験をしないと取ることの出来ない科目が含まれている。こうした科目は理論的な学習、坐学的な科目に対して苦手・出来ないという意識を持っていた学生達に暗記ではなく実際に経験しながら問題意識を育てていく学問があること、それも又重要な学問であることを知らせることになる。

編入希望者のタイプとサポート

編入のタイプもいくつかある。

① これまでの自分の学んだことをそのまま発展させる場合。従って専攻学科・学部は体育系統か健康に関わる学科である。これらはほぼ教員的一种免許と高校の免許の取得を希望している。この中には短大でやってきたサッカーや陸上競技など自分のしてきたスポーツをよりよい形で継続

することに関心を持つ人も含まれる。

② 教育実習は中学校でやったけど「中学ではなく小学校の教員になりたい」と考えて、初等教員養成課程のある四大へ編入する場合。

③ 「教育実習中不登校の生徒の相談にのった。体育も好きだけど教科の教員ではなく保健室の養護教諭になりたい」と方向を定めて、養護教諭の免許を取得するために看護学校に入学を決めた学生の場合。

④ 腰や膝を痛めてしまったので編入先は体育ではなく、別の学部(社会福祉など)を選ぶ。「教免は取ったけれども、仕事としてはリハビリ関係の仕事に就きたい」と医療関係の専門学校に進んだ人もいる。

⑤ これら他に「短大を出たのだから、今度は語学留学をしたい」とアメリカに留学し、physical therapy assistantの資格を取るために勉強している人などもある。あるいは一度就職してから「もう一度きちんと勉強したい。今度は目的を絞って通いたい」と児童教育関係の短大や専門学校に行った人、ダンス・スクール、服飾関係の専門学校など。

⑥ 上記①～⑤の主體的な動機とことなって「兄弟も親も周りが四大卒業だから、自分も四大に入らないと家族の中で一人前に認められない。だから編入したい」と言う場合

もある。

短大への入学動機が多様であるが、一年間学習を続けてくるとどのタイプからも編入希望者が出てくる。はじめは「一種免許の取得」「四大ならどこでもいい」というような考え方をしている学生に「それでは四大に行って勉強が続けられない。わざわざお金と時間をかけて行くからにはどんなことを学びたいのか」と繰り返し問いかける。「いったい何を勉強したいのか。どうしてそれに興味を持つようになったのか」「同じ体育・スポーツを人に教えたいと言っても、学校で行うのと広く社会で行うのでは違う。あなたはどちらをしたいのか」など少しずつこんだ質問を重ね、参考文献を紹介したり、四大で似たようなテーマを課題にして学んでいる卒業生を紹介したりする。

こうして次第に「自分が興味があるのは障害児の体育だ」「野外活動で不登校の生徒が参加するキャンプの手伝いをしたが、なぜ野外活動が不登校の生徒達を揺り動かすことが出来るのかをもっと知って役に立ちたい」「教育実習で保健の授業をしたが、結局生理学的な内容が良く理解していなくて十分教えることが出来なかった。もっと人間の体の生理的な事をしっかり勉強したい」など一人一人学びたい課題が輪郭を持って現れてくる。重要なことは専門

科目を学習する中で、またそれに関わる実験・実習をする中で自己の進路を決定していくことである。このとき学生たちは自分がやってきた部活やスポーツの練習などと学問との関連が認識されると自信を持つようになる。自分の問題関心を学問として学ぶにはどのような領域で、どんな科目を学ぶことになるのかについて専門の先生達や先輩達から話を聞いたたり、実際に編入したい大学に行って、本当にその大学が勉強するのによい環境かどうかについて本人が判断をしていくことになる。その際に四大でのカリキュラム構成や学問の幅が短大と四大ではどのように異なるのか、要求されるレベルの違い、校風、立地条件、男女比やクラブ活動の参加など様々な角度から考える。

短大生からみた四大編入学の意味

編入は以前と異なり、かなりしやすくなってきた。大学を取り巻く環境の変化に対応するかのようには短大の中には「四大編入コース」を特別につくって指導している学校もあるし、予備校に転編入コースを置いている学校もある。武蔵丘短期大学では編入のための特別なコースはつくってはいない。先に見たように短大入学の動機の多様な層から編入希望者が学習の結果出てくる事からすると、編入学の

ための特別なコースは必ずしもよいとは言えないだろう。どこからでも、またいつの時点からでも編入を希望したらそれがかなうような学習の方向付けをサポート出来る環境が誰にでも開かれていることが重要であると思う。

さて実際に編入をして思いを遂げた人達にとつて、編入とは何であったのだろうか。

「四大ではゼミがあつてそれぞれ自分の関心に沿つて勉強できるのが楽しい。いろいろ大変なこともあるけど今しできないことをいっばいやりたい」(女子)、「短大では先生達に気軽に相談をする事が出来たので自分がやりたいものについて考えることが出来た。編入して自分で科目を選択してカリキュラムを組むことから大変だったけど、へあこれが大学なのか」と思った。短大ではみんなが殆ど一緒にのクラスで勉強して、知らず知らずにいるいろんな資格を取ったけど、今思えば自分で考えることが少なかったというのがわかった」(女子)などと短大と四大の良さと違いを認識している。さらに短大時代は「英語は嫌いだ、苦手だ」と逃げ回っていた学生達が「せっかくなので四大に編入できたのだから英会話くらい勉強して外国に行つて、もっと広い世界が見たい」「何か人の役に立つようなボランティアがしたい」と専門科目の学習のみならず多方面に意欲を見せる。

一年浪人をした後に短大に入ったある学生は「自分は二年間の短大でまず二年次に教育実習があったから自分が本当にしたいことが自分に合っているかを考えることが出来てとてもよかった。そして四大にはいってより専門的に体育の勉強も出来たし、中学校の一種免許と高等学校の免許を取る事が出来た。中・高を取ったので私立の併設校の教員も応募できる。編入できることがわかっていたら浪人せずにはじめから(四大を落ちた時点で)、短大に入っておけばよかった(男子)と話す。こうして編入し、四大卒業後公立中学校や私立高校の教員あるいはその後大学院に進

学し、専門科目の教育に携わったり、研究を始める人も出てきた。こうした人達は最初の入り口としての短大があつてはじめて次のステップに進むことが出来たと語っている。

現代のような社会にあつて短大は確たる自分をつくる第一歩としてまさにファーストステージとしての意味を持っていると言える。多様なタイプの入学動機を持った学生達が短大の学習の中で変容していくのはまさに短大がファーストステージとして機能していることの証でもある。